

放送番組センターレポート

BROADCAST PROGRAMMING CENTER OF JAPAN Report

公益財団法人 放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通 11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110 <https://www.bpcj.or.jp/>

■ラジオを楽しむ！(10)

『J-WAVE SELECTION GENERATION TO GENERATION ～STORIES OF OKINAWA～』

6月11日、ラジオ番組の魅力伝える公開セミナー「ラジオを楽しむ！」第10回を情文ホール（横浜）で開催した。今回は、2019年の沖縄慰霊の日である6月23日に放送され、ギャラクシー賞ラジオ部門大賞や日本民間放送連盟賞ラジオ・グランプリを受賞した番組を取り上げた。この番組は、今年5月より放送ライブラリーで公開している。

【ゲスト】

ジョン・カビラ（出演・ナビゲーター）
川平朝清（出演）
高知尾綾子（プロデューサー／J-WAVE）
【司会】音好宏（上智大学文学部教授）

この番組は、終戦から本土復帰まで沖縄に住まい、その歴史を報道する側から見続けた川平朝清氏が、その時代に体験し感じたことを、息子であるジョン・カビラ氏のインタビューを通して伝えた作品で、親子の対話と音楽というシンプルな手法で沖縄の戦後史・放送史を描いたことが高く評価された。本セミナーは、川平氏の志賀信夫賞受賞後、沖縄本土復帰50年目の慰霊の日目のタイミングでの開催と



なり、沖縄県立図書館にもサテライト会場を設け、横浜会場と繋いだ。

番組を企画したきっかけについて、高知尾氏は「カビラ氏が運転する車中で、川平親子の沖縄本土復帰に関する会話を聞いた。言葉遣いが綺麗で、親子で尊敬し合う様子が普通の会話にも出ていた。これを自分だけが聞いていては勿体ない気がした」と振り返った。

企画の相談を受けた時の気持ちを問われたカビラ氏は「普通の親子の会話を、『リスナーと共有する価値がある』と言われ驚いた。認められたような面映ゆい思いとともに、嬉しさもあった」と回想した。

川平氏も「親子の会話が番組になるのかと意外性を感じた。一方で沖縄のこと、自分の生涯のことを改めて話せるまたとない機会だと思い、感謝の気持ちでいっぱいだった」と語った。

番組は、親子の対話に音楽を挟むシンプルな手法で展開する。全体の構成や選曲は、カビラ氏の番組をディレクションする坂本彰範氏とともに決めた。

公式 YouTube チャンネル



放送ライブラリー公式 YouTube チャンネルでは、これまでに開催したセミナーの様子等を公開しています。

【公開中の映像】

- ◆ラジオを楽しむ!『J-WAVE SELECTION GENERATION TO GENERATION/STORIES OF OKINAWA』
- ◆放送アーカイブで語る沖縄の今
- ◆座談会「コラムニストVS大学教授VS雑誌編集者 平成令和とテレビ談義」
- ◆名作の舞台裏『パパはニュースキャスター』
- ◆『ぼんぼこ物語』に見るTBSドラマのDNA

…など

台本はほぼ無く、収録は3時間かかったという。高知尾氏は「中身を想定して企画したわけではなかったので、長い話を聞いた時は感動した。3時間があっという間だった」と振り返った。





カビラ氏が「幼少の頃から父に聞かされていた話に加えて、更に突っ込んだ話ができる機会だと捉えた。50年以上聞いてきたこの話の価値を、皆さんと共有したい思いで聞いた」と話すと、川平氏が「これが実現できたのは番組の力。息子でありながら、純粋な聞き手として切り込んでくる。本当に

貴重で希有な時間を一緒に過ごすことができた」と続けた。

個人史を振り返りながら時代と沖縄を考える番組であったことから、セミナー中も川平氏の生の声で沖縄の放送史が語られた。終盤、最初の沖縄県知事・屋良朝苗氏の『沖縄は復帰したが、内実は私どもが期待したものではない』という言葉を紹介し「沖縄は非常に良くなったが、50年経った今も内実は変わっていない」と思いを語った。

最後に、カビラ氏考案の番組タイトルに絡め“次世代に伝える”ということについて尋ねられ、高知尾氏は「上の世代の話聞きつつ、それを残していくのは放送の使命。今後もその取組

みが必要」、カビラ氏は「一人一人の家族にストーリーがある。個人史を聞く、話すということに価値がある」と答えた。川平氏は「沖縄のことは、若い人に任せたい。今年のギャラクシー賞でも琉球放送と沖縄テレビが受賞し、皆よくやっていると感じた」と後進を称え、沖縄の会場にエールを送った。



■公開セミナー「放送アーカイブで語る沖縄の今」

本年3月より沖縄県立図書館で開始した番組視聴サービス（サテライト・ライブラリー）の周知を目的とした公開セミナーを6月26日に沖縄県立図書館で開催し、オンライン配信を行った。セミナーでは、沖縄出身の番組制作者が、沖縄への思い、番組制作への思い、放送アーカイブの利活用の意義などについて語った。

【ゲスト】

狩俣倫太郎（琉球放送）

平良いずみ（沖縄テレビ）

島袋夏子（琉球朝日放送）

【司会】音好宏（上智大学文学部教授）



狩俣氏はアナウンサーとしてラジオ番組に出演するほか、那覇市が導入した同性パートナーシップ制度や、沖縄戦についてのドキュメンタリー、戦争についてのラジオドラマなどを制作。「沖縄の放送局で働く者として何ができるのか、考えて取り組んでいる」という。平良氏もアナウンサー業務の傍ら、ディレ

クターとしてドキュメンタリーを制作、映画化にも挑戦したことを、「沖縄の人たちが背負わされてきたことが映像に全て刻まれている。それを今の視点で描くことで視聴者に届くと思った」と振り返った。島袋氏は記者や制作者として番組制作に携わり、近年は米軍由来の環境問題をテーマにした番組を制作。「沖縄が戦後や復帰後も、どのような負担を引き受け、何を失い、何を守ろうとしているかが見えてくる」と語った。

沖縄から発信することについて、狩俣氏は「沖縄は良くも悪くも国際情勢を間近で感じる場所。戦争が起これば、基地がある私達は恐怖を感じ、中国や台湾の動きも気にしている。沖縄から発信することを、全国の皆さんも敏感に感じてほしい」と述べた。

また、制作者である三人ともが、復帰50年の節目にアーカイブの意義について考えたという。平良氏は「10年前

に『復帰を知る』というシリーズを立ち上げた際、映像アーカイブを見て、人々の思いを映像に刻んでいくことが大事だと感じた」、島袋氏は「復帰50年特番の制作時に、国内外の公文書館の映像アーカイブをインターネット上で検索し、貴重な映像を見つけた。アーカイブが残っていればパソコン1つでどこでも探すことができる」と話した。

沖縄でのサテライト・ライブラリーの開始について、狩俣氏は「放送後に消えてしまっていた番組が、多くの方にアクセスしてもらえる意味は大きい」、平良氏は「面白く見てもらえる番組を作っている自負がある。教育現場でも活用してほしい」、島袋氏は「昔の番組や全国の地方局で放送された番組を図書館で見られることは有意義で楽しみだ」と話した。

最後に、それぞれが今後どのように放送に関わっていきたいか熱い想いを語り、セミナーは終了した。



■「テレビとCMで見る

平成・令和ストーリー展2022」

7月29日～9月19日、各放送局、制作会社、ACC、東京ニュース通信社などの協力を得て、平成～令和の放送史をテレビとCMで振り返る企画展を開催した。この企画展は、2019年、2021年に続く3回目の開催で、毎回、新たな年の紹介と、各年の社会状況を反映したパネルなどを追加している。今回は「これからのテレビ～コロナを経験して～」のコーナーを設け、これからのテレビや放送はどう変わっていくか、またその可能性などについて、番組制作者の声を届けた。



テレビコーナーでは、話題になった番組を中心に各年を振り返るパネルや200冊を超える『TVガイド』の表紙を展示。また本年夏、創刊60周年を迎えた『TVガイド』の特別コーナーも設置した。CMコーナーでは、ACC賞受賞作品から厳選したテレビCMの上映や時代を象徴するCMのポスターを展示。さらに、業界の第一線で活躍するクリエイターの寄稿により、コロナ禍のCMの変化やこれからのCMについて伝えた。来場者からは「当時の懐かしい記憶がよみがえった」「家族全員どの年代でも楽しめた」など、様々な感想が寄せられた。

■座談会「平成令和てれび談義」

上記の企画展会場内で座談会を収録し、YouTubeで公開した。登壇者は、ペリー荻野氏（コラムニスト）、岡室美奈子氏（早稲田大学教授）、武内朗氏（TVガイドアーカイブチーム代表）。長年テレビを見続けてきた三人が、平成から令和のテレビの思い出や各時代のマ



イ・ベスト番組について語った。冒頭、岡室氏が「各年のパネルの前で1枚3時間は話せる」と笑うと、武内氏も「時間を忘れてしまう」と同意。そんなTV通の3人から懐かしい番組の名前が次々飛び出した。

テレビ放送は来年70年を迎える。「ネットに刺激を受けながらも、万人に開かれたメディアとして良い作品を作っていくことがテレビの使命。良作が次々出てくる事を期待する」「配信で過去の作品が見られる環境になったからこそ、それらに触れた新しい才能が出てくると思う」など、これからのテレビに熱いエールが送られた。

■番組上映会 BLセレクション第2弾

7月12日～9月4日、「ローカル・ドラマ紀行」と題し、全国の放送局が各地域を舞台に制作したテレビドラマを取り上げ、東日本編（5本）と西日本編（6本）に分けて週替わりで上映した。来場者からは「地域ごとに特色あるドラマが制作されていることがよく分かった」「ふだんは見られない地方のドラマが見られて面白かった」などの感想が寄せられた。

上映した番組は、東日本が『さいはての向日葵（ひまわり）』（2007年・北海道放送）、『チャンネルはそのまま！ [1]』（2019年・北海道テレビ）、『小さな神たちの祭り』（2019年・東北放送）、『タチアオイの咲く頃に～会津の結婚～』（2016年・福島中央テレビ）、『誰（タレ）よりも君を愛す！』（2011年・テレビ静岡）。西日本が『月に行く舟』（2014年・CBCテレビ）、『名古屋行き最終列車2019 [1]』

（2019年・名古屋テレビ）、『ごきげんいかが？ テディベア』（2001年・毎日放送）、『ニーハムの旅』（2020年・愛媛朝日テレビ）、『ツナガール～明日にエール～』（2013年・福岡放送）、『宮崎のふたり』（2016年・NHK宮崎）。来場者はのべ380人。

9月16日～10月27日開催の「番組を視聴する会」では「平和を伝える・記録する・考える～国と国のはざままで～」と題し、平和関連のドラマやドキュメンタリーを特集している。

■夏休み体験教室を開催

子どもゆめ基金の助成を受け、放送の様々な仕事について学べる体験教室を夏休み期間中に開催した。

【日テレ体験教室】

7月30日、日本テレビ技術統括局の協力で、小4～中学生と保護者を対象に横浜情報文化センター内で開催した。新型コロナウイルス感染症拡大のため2019年以来3年ぶりの開催



で、参加者もこれまでの半数の1回40人を上限とした。放送技術の面から見た番組作りについての講義の後、カメラや編集機などの放送機器に触れたり中継車に乗ったりと、様々な体験を行った。午前・午後の2回開催、参加者は合計74人。

【ラジオ・DJ体験教室】

8月11日、FMヨコハマの協力で、小4～中学生を対象にFMヨコハマ内で開催した。ラジオの歴史やラジオ局で働く人についての話を聞き、また局内のスタジオでミニ番組作りを体験した。参加者は合計23人。

■核・平和関連番組のNHK・民放 合同上映会を広島で開催

8月7日～10日、広島のNHK、民放テレビ4局と放送番組センターが連携し、広島平和記念資料館で「テレビが記録したヒロシマNHK・民放番組上映会2022」を開催した。この上映会は3年ぶりの開催で今回で6回目。上映番組は、広島の各局が制作したドキュメンタリーやドラマ14本で、一部を除き、放送ライブラリーの公開番組の中からピックアップしたものの。来場者はのべ760人。

■公共施設での番組利活用

【夕張市拠点複合施設りすた（北海道）】

8月17日、市民向けの上映会で『どさんこドキュメント 心を彫る 時を刻む 安田侃とアルテピアッツァ美唄』（2008／札幌テレビ放送）が上映された。来場者はのべ30人。

■教育機関での番組利活用

【学習院大学】

春学期、経済学部経済学科「スタ

ディ・スキルズ講座」（鈴木賀津彦非常勤講師）の授業で『映像'15 なぜペンをとるのか 沖縄の新聞記者たち』（2015／毎日放送）が利用された。

【関東学院大学】

春学期、人間共生学部コミュニケーション学科「マス・コミュニケーション」（鈴木賀津彦非常勤講師）などの授業で『映像'15 なぜペンをとるのか 沖縄の新聞記者たち』（2015／毎日放送）が利用された。

【東海大学】

7～8月、文化社会学部広報メディア学科「ゼミナールC」（水島久光教授）などの授業で、『描けなかった2枚の絵 原爆が投下された日の記憶』（2008／テレビ新広島）など2本が利用された。

【成城高等学校】

2・3年生「高校日本史・日本文化史特講（夏期講習）」の授業で『ポスト美術館物語 日本美術に捧げた愛と魂の記録』（1983／日本テレビ放

送網）、『北前船の海道をゆく 雅と豪放 湊町酒田の商人文化』（2013／山形テレビ、BS朝日）が利用された。

【成城中学校】

3年生「特別活動」の授業で『報道特別番組 沖縄苦闘の27年 沖縄戦から復帰まで』（1972／TBSテレビ）が利用された。

【宝塚市立宝塚中学校】

3年生「道徳」の授業で『映像'17 沖縄 さまよう木霊 基地反対運動の素顔』（2017／毎日放送）が利用された。

【カレンダー】

9/16-10/27	番組を視聴する会「平和を伝える・記録する・考える～国と国のはざままで～」
10/15-11/27	2022秋の人気番組展
11/5	公開セミナー 第52回 名作の舞台裏『風神の門』
11/20	公開セミナー（仮）番組アーカイブの意義と未来への活用2022

■2022.6～2022.8の公開番組

【テレビ番組】

『大黒座ベイ・ブルース』

2019.03.17／北海道文化放送

『カネのない宇宙人 閉鎖危機に揺れる野辺山観測所』

2019.11.30／テレビ信州

『土がくる 規制なき負の産物の行方』

2019.11.20／CBCテレビ

『光はここに

～真備町 それぞれの選択～』

2019.07.22／瀬戸内海放送

『ハイスクールは水族館!!』

2019.05.25／南海放送

『再び歩くために

～難病ALDとたたかう少年～』

2020.02.24／TVQ九州放送

【ラジオ番組】

『新日曜名作座 センセイの鞆』[1]～[5]

2008.10.12～11.23／NHK

『ヤジと民主主義

～小さな自由が排除された先に～』

2020.05.25／北海道放送

など、テレビ153本、ラジオ46本。

新公開番組 PICK UP!

さあ、縄文の話をしよう ～ある大工の挑戦～

2019.09.21／山梨放送

取材：小林哲也

プロデューサー：武井功

石斧を携え、動物の皮をなめした服をまとい、自ら「縄文大工」と名乗る雨宮国広さん（50歳）。化学原料を使った大量生産型の家作りに疑問を持ち30歳で大工として独立。その後、縄文時代の住居を再現する仕事で石斧と出会う。やがて、石斧ひとつで家や舟を作り、現代人が失った生きる知恵を持つ縄文の暮らしこそ、目指すべき持続可能な生き方と考えるようになった。

現代社会から外れた生き方を貫くことで、時に家族との関係に葛藤する雨宮さんに、国立科学博物館から「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」で使用す

る丸木舟の制作が託された。台湾から与那国島まで200kmの海路を、太陽・風・波を読みながら黒潮を横断する、旧石器時代さながらの壮大な旅だ。材料となる杉は直径約1.2m、長さ7.5mの大木。木の切り出しからくり抜きまで、石斧を振った回数は8万回以上にのぼった。漕ぎ手と共に試行錯誤を繰り返し、自然が与えてくれた材料だけで作り上げた丸木舟「スギメ（杉の女神）」がついに迎えた出航。台湾を出発したスギメの到着を、雨宮さんは与那国島で待つ。

雨宮さんは石斧の魅力を「自分の思うようにならないところ」と語る。それは、時に転覆し浸水しながらも、知恵と工夫で乗り切り新たな地を目指した丸木舟の航海のようだ。そして「これからも自然と向き合い、己が目指すところに向かって生きていく」と語る雨宮さんの人生そのものとも重なって見えてくる。

◆放送ライブラリー公開番組数

テレビ番組18,540本／ラジオ番組4,970本／テレビ・ラジオCM12,200本／劇場用ニュース映画2,683項目（2022.9.30現在）